

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	(第5章)愛一家親(コミュニティレストラン・社会的企業)について：ボランティアが集まる、継続性の高い社会的企業の仕組み
Author	中村 満
Citation	URP「先端的都市研究」シリーズ. 16巻, p.17-19.
Published	2019-03-25
ISBN	978-4-904010-31-0
Type	Book Part
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	包摂都市ネットワークの最前線：東アジアインクルーシブ都市ネットワークジャパンの活動報告
DOI	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

第5章

愛一家親（コミュニティレストラン・社会的企業）について —ボランティアが集まる、継続性の高い社会的企業の仕組み

中村満

愛一家親では、仏教や儒教を用いた学童保育の場所として、学習支援を行っている。特に重要なことは、学習支援については無償で行っていることである。これは儒教の教えの奉仕の精神に基づいたものである。

この愛一家親がある地域は5年前の設立時には労働



図 5-1 愛一家親の外観

者が多く、不良の子どもが多い地域だった。現在でも南から台北に出稼ぎにくる労働者が多い。こうした地域性から、当初は小学生が中学に上がれるように、勉強の基礎を身に付けることを目的としていたが、道徳などを通し、礼儀などを学ぶようになっていった。この学校の運営のシステムとして、ベジタリアンのためのコミュニティレストランなどで得た利益を専門的な先生の講師料などの経費に充てており、直接的に「学習」についてはお金をかけず、誰でも受けれるようになっていた。また先生は9人に一人の割合で配置している。子どもたちにとって、第二の家のような存在を目指している。

最初は6人の生徒しか利用者がいなかったが、現在では200人の生徒で7教室を運営している。昼ごはん時になると低学年が訪れ、3時ごろには

高学年、夕方には中学生がやってくる。

子どもたちがどうやって集まってきたのかというと、親同士のネットワークや学校の先生からの紹介でくる子が多く、また、最近では友達同士で連れてくることもある。また、コミュニティレストランで子どもたちを見かけた人の口コミで広がっている側面もある。

子どもたちの見守りの機能として、学校のソーシャルワーカーと会議を行うこともあるし、週一で報告会も施設内で行っている。ただ、例えば自閉症などの障がいがあるからといって、特別なプランを用意しているわけではない。障がいのある子もない子も、将来は同じ社会で暮らしていかななくてはならない。先生たちの愛情を通じて、そのことも学ばせている。また、親子で楽しめる行事や親向けの講座も定期的に行っている。

ケースとして、家庭内に問題があり、子どもを施設にある宿舎に泊めた例もあるという。

最初はコミュニティレストランも先生たちが子どもたちにご飯を食べさせるために作ったものだったが、いつの間にか保護者がボランティアとして入ってきて、子どもたちと保護者がご飯を食べる場所となっていたが、地域に開放し、事業を行っていくことがいいのではないかと保護者の発想が



図 5-2 商品の売り上げも講師料となる



図 5-3 コミュニティレストランの様子

生まれ、始まった。

視察に訪れ、子どもたちの笑顔を見ると、本当に楽しそうに授業を受けていることが分かった。また多くの人に支援され、経営が成り立っていることも分かった。案内をしてくれた人の言葉にもあったが、基本的には子どもたちの教育がメインにあり、その取り組みを継続させていくため様々なアイデアが集まり、自然と社会的企業として成立したような印象を受けた。その根本には仏教や儒教などの教えがあり、またそれを受け入れる文化が台湾に根付いているからこそ、保護者を含めた地域からも支持されているのだろう。そう



図 5-4 教室の子どもたち



図 5-5 部屋に飾られている教え

した部分が日本では一般的に受け入れがたい印象も受けた。だがしかし、社会的企業としての仕組みは、実に参考にしたいものがあった。冒頭でも述べたが、学習支援に関するところは無償で行い、一切利益を生んでいない。これは事業が失敗したとしてもまた別の手立てを考えることや、支援方法を見直すことによる経費削減の道を探るなど、すぐに支援ができなくなるという危険性が極めて少ない。ましてや愛一家親は、ボランティアから始まっている経過があるので、さらにその心配は少ないように思える。

日本においても、地域にそうしたボランティア精神をもった材が集まる場所づくりが今後は必要だと考えさせられた。